楠森河北家住宅（くすもりかわきたけじゅうたく）

　楠の森に囲まれた山北の河北家は、浮羽の地に８００年間２７代続く旧家である。「壁結（かべゆい）」や台所に巨大な海老の注連縄など、中世を偲ばせる民俗的に貴重な祭事が今でも多く残っている。 楠森は古くからの屋号である。

【美術評論家　故河北倫明】

　日本近代美術史研究の先駆者である美術評論家河北倫明は、この家に生まれた。ユニークな鑑賞眼で瞬く間にジャーナリズムの寵児となり「花開時蝶来　蝶来時花開」という良寛の句を愛し、よく作品を花に、批評家を蝶に例えた。

　絵画展で河北がふりかえった絵は世に出るとまでいわれ、青木繁や坂本繁二郎を世に知らしめたのも河北である。「美の心を芽吹かせる春風を吹かせたい」と、美術研究の人材育成と、郷土の美術発展に生涯力を注いだ粋人だった。

【壁結（かべゆい）】

　幾重にも立てた真竹を四段の孟宗竹に縄で結い付けた屋敷を取り巻く竹垣の修復作業で、三百年ものあいだ、竹と荒縄だけを用いる昔ながらの技法で受け継がれている旧正月の風物詩。中世では各地の領主の館や地侍の屋敷では行われていたが、現在では竹垣を残す屋敷が少なく北部九州で行っているのは河北家だけである。後世に伝えたいと住民の善意で続いている。

みのう自慢（みのう悠々交流圏連絡協議会）より引用